

Academic Alpine Club of Hokkaido

Kamchatka '92

カムチャツカ半島

イチンスキー(3621m)・ハンガール(2000m)

登頂報告書

北海道大学山岳部

カムチャツカ遠征隊1992

INTRODUCTION

山岳部部长 西 信三

北海道大学山岳部カムチャツカ遠征隊1992が目指すイチンスキーおよびハンガール両峰の登頂に成功した事は大変喜ばしいことである。この成功は澤柿隊長をはじめ隊員諸君の日頃の肉体的・精神的鍛練と今回の遠征のための周到な準備の結果であり、その努力に敬意を表したい。遠征の発端からを要領良く簡潔にまとめた本報告書が今回刊行され遠征が完了することとなった。

今回の遠征は両峰の登頂という成果以外にもカムチャツカ山域について貴重な知識や情報の収集や集積を行った。今回の成功は遠征隊を送り出した山岳部全体の活動の水準の高さを示すものでもあり、後に続く隊が続出する事を期待する。

遠征に関し、御指導、御助言、御援助を下された北大山の会会員諸氏をはじめ関係各位に厚く御礼申し上げたい。

1992年 8月



ПРЕДИСЛОВИ

CONTENTS

1.	第二次カムチャツカ遠征までの経緯.....	4
2.	隊員構成.....	5
3.	日程.....	6
4.	山域概説.....	7
5.	登山記録.....	8
6.	カムチャツカ断章.....	10
7.	アムール河に日は落ちて.....	18
8.	資料	
	涉外.....	21
	装備.....	22
	食料.....	23
	気象.....	24
	会計.....	25
	御協力者芳名録.....	26
	遠征隊留守本部	

1. 第二次カムチャツカ遠征までの経緯

遠征隊隊長 澤柿 教伸

日本最北端の地、北海道を本拠地として活動してきた北大山岳部は、創立当時からその延長上の山域として北方四島、千島、樺太といった地域にも足跡を記してきた。その活動は、当時これらの地域が日本の勢力下にあった昭和初期に集中する（部報2号に詳しい）。極東北方地域に活動範囲を拡大していく中で、千島の北にひかえる広大な山域“カムチャツカ”への遠征の願望は起こるべくして高まっていくことになるが、当時でさえ彼の地は距離的にも政治的にも遠い地であり、遠征の計画が実現することはなかった。戦後、カムチャツカは軍事的な要点としてロシア人すら自由に出入りのできない地域とされ、外国人の立入を一切拒んできたが、1980年代後半に始まった世界情勢の変化にともなって、ようやく外国人に開放されるような気運が出てきたのである。

ちょうどそのころ、山岳部では5年ぶりの部報の編集が開始され、すでに未知なる山域を失ってしまった、山岳部内のさまざまな問題を浮き彫りにしつつあった。同時に、部報13号をかざるような時代を反映する新しい企画を求めている。一方、現役と若手山の会会員の間では、久しく行われていなかった海外登山への願望が高まり、一部の人間が集まって海外登山研究の活動を開始していた。そんな中で、ヒマラヤとは違った海外の山、しかも、いつもやっている山登りに近いスタイルで楽しめそうな、北海道の山と共通の魅力を秘めた極東の山岳は、絶好の目標となったのである。

こうして、1988年に部報13号の編集者も交えて極東山岳研究会が発足し、千島・カムチャツカの山岳地理的な研究と、将来の遠征に向けて対ソ連との交渉を開始した。研究の成果は1990年春に部報13号で発表すると共にクラーク会館で発表会を

開催し、各方面で好評を得たが、実際の交渉のほうはなかなか進んでいなかった。山岳部は、この企画への援助を山の会理事会に要請して、かねてから個人的にもカムチャツカ登山をもくろんでいた越前谷氏らの協力を得て体制を強化し、情報収集とソ連側とのコネクションの模索を継続した。

この間、1990年春に北大山スキー部が北千島に遠征して極東登山の先鞭をつけ、1991年3月の同志社大学に続いて、5月には東京雲稜会が、7月には北海道隊がカムチャツカ最高峰のクリチェフスカヤに登頂した。

1991年6月に、ようやく山の会の要請がカムチャトイントールに受け入れられてコリヤークスキーとオパーラの二峰の登山の許可が下り、上野八郎氏をはじめとする7名（含現役1名）が9月にAACHカムチャツカ遠征隊91として遠征した。

二次隊の申請は1992年1月にカムチャトイントールに受け入れられて、1992年6月初旬の2週間で総勢10名がイチンスキーとハンガールに登ることが決まった。当初の研究メンバーの約半数はすでに卒業して遠征に参加する余裕がなく、10名の定員を埋めるのにフラテ山の会から2名と探検部OB1名の参加を得ることとなった。遠征の準備の一環として十勝の春合宿を位置づけ、他団体のメンバーとの相互理解の場として活用した。

今回のカムチャツカ遠征隊は、1991年の遠征に継ぐ第二次遠征隊として現役主体で組織されたが、その中心はこれまで研究を行ってきた現役であり、一次隊よりも前から存在していたと言ってもよい。また、山岳部の将来をかけて、今後継続してカムチャツカ登山を定期的に行っていこうとする方針からすれば、今回の遠征こそが本格的な一連のカムチャツカ登山の始まりとなるものである。

2. 隊員構成



隊長 澤柿 教伸 (25)
北大大学院環境科学
研究科博士1年



副隊長 石橋 英二 (24)
北大農学部卒



植田 勇人 (23)
北大理学部地鉱大学院
修士1年



本多 和茂 (22)
北大農学部4年



小倉 憲悟 (21)
北大教養部2年



銭谷 竜一 (20)
北大教養部2年



日下 出 (20)
北大教養部2年



澤田 実 (23)
北大教育学部聴講生
北大探検部OB



登山隊のメンバー達



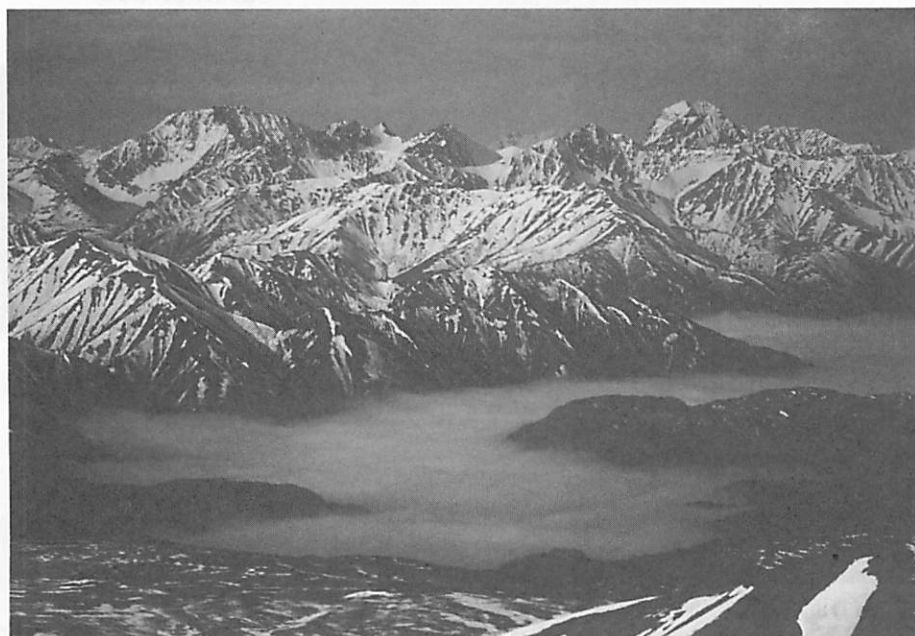
上田 エリヤ (25)
北大医学部5年
フラテ山の会



小杉 尚 (21)
北大医学部4年
フラテ山の会

3. 日程

5. 21. 部員総会。於北大クラーク会館。
5. 31. 札幌駅発。
6. 1. 新潟空港発。ハバロフスク乗り継ぎ。
6. 2. ペトロパブロフスク到着。
カムチャトインツールのシヒアン、ペトラ
ーショフ両氏と打ち合わせ。
登山ガイドと夕食。
6. 3. 早朝ペトロパブロフスクを出てトラックで
ミリコバの空港へと向かう。
15時半頃、ミリコバからヘリコプターでイ
チンスキーのベースに向かう。
17時頃、イチンスカヤベースキャンプ設
営。
6. 4. イチンスカヤ登頂。
6. 5. 休養。
6. 6. 自由行動。スキー。ベースキャンプ周辺の
散策。
6. 7. 休養。撤収準備。
6. 8. ヘリコプターでハンガールのベースキャン
プへ移動。
6. 9. ハンガール登頂。
6. 10. スキー。ベースキャンプ周辺の散策。
撤収準備。お別れパーティー。
6. 11. ヘリコプターでミリコバに帰着。
トラックでペトロパブロフスクに移動。途
中で温泉に入る。
深夜、ペトロパブロフスク発。ハバロフス
ク着。
6. 12. ハバロフスク観光。
澤柿、石橋、植田、本多、小倉、日下、上
田が新潟空港に帰国。
6. 13. 銭谷、澤田、小杉が新潟空港に帰国。
7. 10. 遠征報告会。於北大クラーク会館。



イチンスキーの
ベースキャンプ
から望むカム
チャツカの山な
み

4. 山域概説

● 植田 勇人

カムチャツカ半島は北海道東端から北東にのびる千島列島がユーラシア大陸に合する北緯52～58度に位置する。中央部にカラマツタイガ、山岳地と北部に広くツンドラが分布する他は白樺の森林に覆われた半島である。

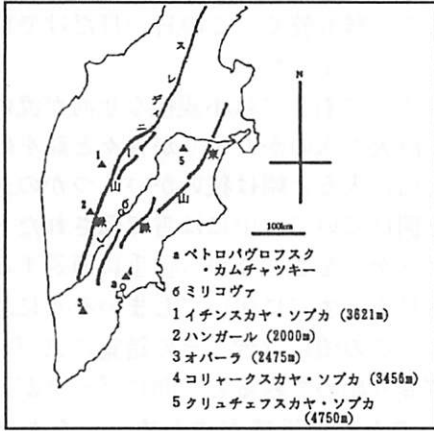


図-1 カムチャツカ半島概念図

図-1に示すとおり、スレディニー山脈（中央山脈）とヴァストチニー山脈（東山脈）が中央部の低地帯によって隔てられて、北東-南西方向に並走している。ヴァストチニー山脈は主として非火山性で氷河地形を多く残した痩せた山稜よりなり1500m～2000m程の高さの山々が連なる。スレディニー山脈北部・中部は多くの火山よりなり、今回登頂したイチンスカヤ・ソプカ（3621m）を除いては、2000m～2500mの高さの山々が溶岩台地の上にそびえている。スレディニー山脈南部は殆どが非火山性で2000m前後のかつて氷河に削られた山々が広大な地域に分布している。今回登頂したハンガール（2000m）等一部に火山が見られる。半島東部ではヴァストチニー山脈と斜交して多くの火山が列をなしており、半島最高峰のクリュチェフスカヤ・ソプカ（4750m）等、3000mを越える半島屈指の高峰が見られる。

イチンスカヤ・ソプカは円錐形の火山で、北面にはカルデラが見られ、中に溜まった氷河が縁から周囲に流れ出している。南・東西面は比較的起伏に乏しい斜面よりなり、頂上周辺および大きな谷には小規模な氷河が見られる。頂上は、北峰・中央峰・南峰に別れている（図-2）。

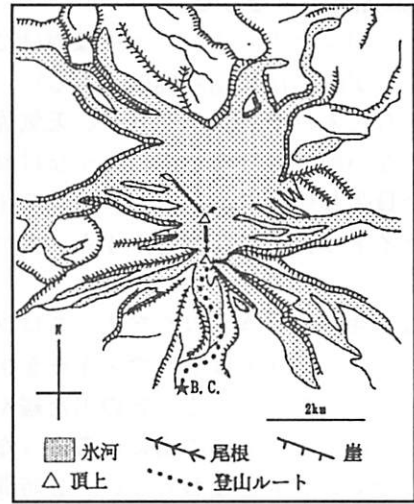


図-2 イチンスカヤ・ソプカ概念図

ハンガールは直径2kmの小規模なカルデラをもつ火山で、カルデラの底は湖となっている。痩せた尾根よりなる外輪山の東端に最高点（2000m）がある（図-3）。

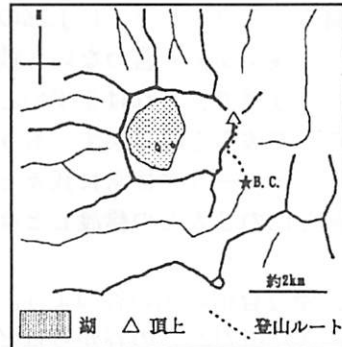


図-3 ハンガール概念図

5. 登山記録

イチンスカヤ・ソブカアタック、
そしてハンガールへ

石橋 英二

6月3日、イチンスキーアタックの日である。前日、ペトロパブロフスクからトラックに揺られること6時間、ミリコヴァからヘリコプターで飛ぶこと1時間余りでベースキャンプに入った。B.C.の位置は予定していた北面ではなく、南西面の標高1800m付近となった。

B.C.から見上げたイチンスキーはやけに近く感じられる（実際には標高差1800mある）。空には雲も数えられる程でアタック日和。天気周期もよく分からないので行けるときに行かなければと、7時、全員張り切って出発した。パーティーはロシア人ガイド4人を含む総勢14人。大パーティーである。

我々はスキーをはき、ロシア人たちはツボ足、フェージャとポーリャは下りでスキーをするためにシートラして登っている。岩の出た緩やかな尾根を登っていると、十勝の山にいるような気がしてくる。全くいつもと変わらない。2時間程度スキーで上がると尾根は傾斜を増し、岩混じりの斜面に吸収される。ここでスキーを脱ぎ、アイゼンを着ける。このまま正面の斜面を登るか、左ヘトラバースして上部の谷に入るかで意見が分かれるが、結局トラバースすることに決める。ロシア人3人は既に西側の谷をダイレクトに上部の谷目指して登っている。我々が何も言わないと彼らはどんどん行ってしまおうので、これはまずいと上部の谷に入ったところで彼ら呼び戻す。もう一人の通訳兼ガイドのヴァレーリアは常に我々と一緒に行動して、我々と他の3人との橋渡しとなってくれた。

上部の谷は、陸万合宿の光の谷のよう。スキーをしたら楽しそうな所だ。この谷からはピーク左手に見える大きな雪面を目指してトラバースぎみ

に登っていく。ラッセルもなく快調な登りなのだが、暑さと旅の疲れがとれていないのか、全体に歩くペースは遅いようだ。この暑さはなかなか曲者だ。6月の日の長い時期である。強烈な日差しと雪面からの照り返しで頭はボーっとし、顔は火照ってくる。喉も乾く。この日一日だけで真っ赤な顔になってしまった。

目指す雪面の右手には小規模な氷河が流れ落ちていて、巨大な氷のかたまりが青々と顔を出している。雪面に入ると幅は狭いがいくつかのクレバスが口を開けていて、中には雪で隠されたものもあり、ピッケルをさしながら慎重に通過する。ベースから見るとすぐに届いてしまいそうに思えたピークも、この頃には皆、その錯覚に気づいていた。いざ登り始めてみると一向にピークが近づいてこないのだ。遠近感がつかめていなかったのだ。日本の山とのスケールの違いを初めて実感できた。ヒマラヤのスケールはもっと大きいのだろう。

今登っている雪面は傾斜も急で、新雪の下は堅い氷である。ジグザグをきって登り続けていると、日下が何度か足をつってしまった。ふくらはぎにはつらい登りだ。小倉も体調が悪いと言い出した。時間は既に1時を回っている。さてどうするかで1時間余りの議論。結局日下一人を残してピークへ向かった。この頃になると大分雲が湧いてきて、再び歩きだすころにはすっかりガスに包まれてしまった。ガスの中、変わらぬ傾斜の雪面を登り続けること1時間、数mの段差を登りきると、平らな頂上の一部にひょっこり顔を出した。視界が効かない中、恐らくここが最高点だろうという所で握手をかわした。15時30分。チャムラン登頂以来丁度30年。いくつものピークで掲げられてきたエーデルワイスの部旗を取りだし、記念撮

影。喜びの声が響く。人数が多いので騒々しい位だ。入れ替わり立ち替わり写真を撮り合い、降り始めた雪にせかされるようにピークを後にした。

下りは登りと違うルートを選んだ。ロシア人のガイドのアドバイスに従ったのだ。彼らのルートファインディングは確実に信頼できるといえる。パミールや天山の高峰に何度も登ったことがあるという。ガイドのひとりフェージャはピーク直下からベースまでスキーで滑降していった。全員感心することしきり。彼は、カーメンの4000m付近からスキーで降りたこともあるそうだ。一方の我々はアイゼンで慎重に下っていたことは言うまでもない。

.....

翌日から3日間、ヘリコプターが迎えに来るまで我々には特にすることがなかったが、こんな素敵な場所でのんびりできたのは何という贅沢だったことか。今の生活の何と単調なこと。街の生活の中であの時を思い出して時々ボーっとしてしまうのは私一人だけではないだろう。

.....

6月8日、快晴。11時頃ヘリコプターが爆音をとどろかせて迎えに来た。ハンガールB.C.への移動だ。ヘリコプターのパイロットはイチンスキー一周というサービスをしてくれた。予定していた北面のルートは大きな氷河が発達し、厳しそうに見える。その後の景色は山また山。果てしなく続いている。イチンスキーのB.C.から見えた山々の上空を通過していく。魅力的な山々が次から次へと現われてくる。最後にハンガールの火口湖の上を飛び、B.C.に着陸。周りをぐるりと山に囲まれた気持ちのいいところだ。予定していたハンガールの東面である。雪の消えたツンドラの上に

テントを張る。近くの沢には水流が顔を出しているところがあり、水を汲むことができる。地面には直径5cm位の穴がいくつも開いていて、イブラシカという地リスの仲間が時折そこから顔を出して愛嬌を振りまいてくれる。

.....

6月9日、今日も快晴。ハンガールピークには2時間余りで着いてしまった。技術的にどういうところはない。下りは一気に尻セードで下った。

ハンガールは絶好の展望台だ。眼下には火口湖が白く、遠くにはイチンスキーがひとときわ高く、大きい。周囲にはアルプスの様な山から大雪の様な山まで、名もない山々が広がっている。遥かかなたにクロノツキーの姿も見ることができる。これだけのフィールドが身近にあったらと考えると、ワクワクするようなプランがいくらかでも湧いてくる。しかもこれらの山々にはほとんど人が入っていない。手付かずの自然が残されているという。これから北大山岳部が目指す山域としてカムチャツカはまさにうってつけと言えよう。

.....

6月11日、ヘリコプターはやって来た。再訪の思いを胸に我々はヘリコプターに乗り込んだ。

6. カムチャツカ断章

カムチャツカ再訪

小倉憲悟

しばらくうとうとして目が覚めると、飛行機は明け方のカムチャツカの上空を飛んでいる。昨年9月に来て以来2度目のカムチャツカである。前回ピークに届かなかったコリャクスカヤ・ソブカ(3456m)が目の前に現われると、いよいよペトロパブロフスクに到着する。よく見ると山肌は黒々としている。雪に覆われると鋭く浮かび上がる稜線も雪がなければやや迫力に欠ける。南面とは言え3000mでこれだけ雪が少なければ、イチンスカヤとハンガールも雪がないんじゃないかとやや不安になる。

○○○

この日は予定が変わってペトロに滞在することになった。街のレストランで夕食を済ませると、前回のガイドだったビタリーが待っていた。彼によると、これも前回のコックのニーナが、僕達が昼間街でインタビューされたのをテレビで見て、しびれをきらせて待っているらしかった。ニーナの家で再会を祝って乾杯する。満腹の上に次から次へと皿を勧めてくれるあたりは豊似川の大庭さんのようだ。国や暮らしぶりが変わっても、彼らの誠実さは変わっていなかった。

○○○

翌日トラックでミリコヴァに向かった。前回一緒だったヘッドガイドのコーリャ、働き者のヴァーシャは今回も一緒に、アレクは大型トラックの運転とミリコヴァでヘリの手配をしてくれる。他にはメスナー似のフェージャ、人のよさそうなボーリャ、通訳でアメリカ人みたいなヴァレリア、コックのアーラおばさんが同行する。

○○○

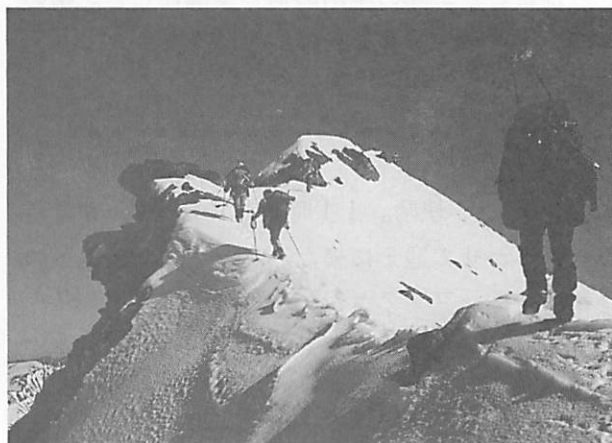
アタックの日は朝から天気良かったが、僕は

きのうからのせきがひどくなり呼吸が苦しく、始終遅れ気味だった。肝心な時に体調が悪いなんて、今まで何をしてきたのかと思うとくやしくてしょうがなかったがピークに立って部旗を掲げて写真を撮ると安心した。

○○○

次の日からヘリが迎えに来るまでは、各自スキーをしたり昼寝をしたり、そのうち暇をもてあましてナポレオンに熱中しはじめたりしている。日本では猛威をふるう雨男隊長の低気圧も、異国のお天道様の下では影響はないらしく、連日の強い日差しにみんな顔をヒリヒリさせていた。ヘリが来る予定の日もいい天気、予定どおりやってきた。去年のオパーラの時は3日もヘリが来なかったのに、今回はうまくいった。ヴァーシャがうれしそうに僕に「アパーラ、アパーラ」と合図していた。

○○○



ハンガールへの登り、外輪山の稜線を行く

ハンガールに移動した次の日もいい天気で登頂できた。ハンガールからは眺めが良く、どういう訳かピークに立っていた三角点を除けば、360度見

渡すかぎりカムチャツカの大自然の山々に囲まれていた。北には先日登ったイチンスカヤがあり、西は火口湖を見下ろし、南のペトロロの方向にはバケーニン、ジュパノフスキーが見える。そしてはるか東にはかすかにクロノツカヤ・ソプカの尖峰が確認できた。

○○○



6月3日
イチンスキー(3621m)登頂、
ピークはガスの中だった

6月9日

ハンガール(2000m)登頂、ピークには立派な三角点があった。背後にイチンスキーを遠望する。



最終日も予定通りヘリが来てあっという間にミロヴァに着いてしまった。しかし、ビザを延長してもう何日か滞在するつもりが、帰りの飛行機チケットの予定がとれないので今日中に帰ることになってしまった。トラックは一路ペトロロへと走っていく。窓の外には、広大で美しいカムチャツカの原野が、明るい日差しに輝いている。みんな疲れてうとうとしている。しかし今日中に帰ることになった以上、僕はとても寝てはいられなかった。ガナルスキー山脈を過ぎ、マルカの温泉

でゆっくり休憩して再び走り出すとまもなくコリャクスカヤが見えだし、もうすぐ旅も終わってしまう。来るときは延々とかかったのに帰りはすぐに着いてしまうように感じるのは気のせいだけではないだろう。

○○○

昨年コリャクスカヤのアタックの帰りに会ったドイツ隊の中に実はフェージャがいて、彼とは一度会っているらしかった。そういえば髭面の人と握手した覚えがある。彼が言っていた「Mountain is my life」という言葉が印象に残っている。

○○○

別れ際に彼らは「今度は夏に来るといい、夏が一番美しい季節だ」と言っていた。しかし、僕は次は冬に来たいと思う。カムチャツカの冬はどんなに厳しいのか興味がある。僕達がいつも行っている冬の十勝・日高での経験を生かして、厳冬のカムチャツカを目指そう。

○○○

それぞれの思いを胸に名残惜しいカムチャツカを後にした。

カムチャツカ散歩記

植田勇人

今回の遠征では2つの山ともそれぞれ1日で登ってしまったため、かなり時間が余った。ここでは、そんな暇な時間を使ってB.C.の周辺を散歩した時のことなどを思い出すままに綴ってみた。

△△△

6月8日(月)快晴

ヘリコプターでの遊覧飛行の末、ハンガールのB.C.予定地に着く。9割方雪の残った広い谷底で、所々褐色のツンドラが島のように顔を出している。B.C.もそういった島のひとつに建ってた。地面には直径10cm程の巣穴がいくつか開いている。辺りを見回すと草地の所々にリスみたいな奴等がいて、こちらを伺っている。もっと近くで見ようと、B.C.の2つ



スレティニー山脈のパイン

北隣の島の見晴らしのいい小丘の上にマットを敷いて居を構え、再び周囲を見回した。20m程離れた草の陰に1匹、隣合った周囲の島じまにあと3匹いて、みんなこちらをじっと見ている。パレリャによれば、こいつらは地リスの類で、地元では“ユーラシカ”(ивражка)というそうだ。エゾリス程の大きさの黄褐色のリスで、しっぽが大きく、耳は小さく、丸まるとして美味そうである。

さて、辺りは見知らぬ侵入者のために緊張感が張りつめていて、何かしようものならすぐに巣穴

に飛び込むぞ、という気持ちがひしひしと伝わってくる。こういう時にはからかいたくなるのが人情である。そこで一番近くの(一番おびえている)奴に注目した。彼は恐怖と、生まれて初めて遭う(?)2本足直立動物を見たいという好奇心が葛藤しているのか、短い周期で頭を上げたり下げたりピコピコやっている。僕はさっと身を伏せて彼の視野から隠れた。彼は少し間をおいて、ぴよこっと頭を上げてこちらを見ようとする。ひょいと身体をを起こしてやると、あわてて頭を引っ込め再び草葉の陰からじっと見つめている。次に僕は彼の気をひこうと、静かに立ち上がり怪しげな踊りを踊り始めたが、彼は顔色一つ変えず

静かに見つめているので何だか気まづくなり、やめてしまった。奴等は僕の動きには敏感で、ちょっと身体を起こしたり近づいたりするとピリピリと緊張するが、音に関してはどうでもいいらしく、くしゃみしたり屁をこいたりしても全く反応しない。

そうこうしているうちに、アーラお婆さんの昼ごはんの時刻も迫ってきたので、僕はすっと立ち上がり、B.C.へ帰ろうとした。その瞬間、彼は「チチッ」と叫び、しっぽを強く震わせてから巣穴に飛び込んでしまった。それを見た隣の島の奴がしっぽを振り、それを更に隣の島の奴が見てしっぽを震わせた。ほんの1~2秒の間のことである。奴等は巣毎に見張りを置き、敵が近づくとしっぽを震わせて巣間で危険を知らせ合う“のろし作戦”をとっているらしいのだ。僕は奴等のコミュニケーション法の一

部をかいま見て、何だかとても得した気分で B.C. に戻った。

△▲△

昼めし後も何もやることなく、昼寝にもうんざりしていたので、スキーをはいて少し遠くまで散歩に行くことにする。連日の日射しのせいで雪が腐っていて新雪でもないのにすねまで潜り非常にかかったり。ツンドラの島のそこここでユーラシカがいたちのように立ち上がったたりしっぽを震わせたりしている。歩けどもキツネやオコジョの足跡も無ければ空を舞うワシタカの姿もない。この季節、奴等には天敵がないのだ。ツンドラはまさにユーラシカ・パラダイスであった。奴等の他には、ヒバリのように鳴きセキレイのように尾を振る白黒の鳥と、喉の赤いチドリのような奴等がうろうろしている。時々ヒグマの足跡を横切る。雪の上にはまだ巣の埋まっているユーラシカの穴が開いていて、ウサギのを小さくしたような足跡が出入りしている。僕は午後の大いなる安らぎの中をサクサクと東へ歩いた。

しばらく行ったところで、排便がてらそのままの姿勢でしばらくツンドラをじっと見ていた。バセリを脱色して乾燥させたようなコケ（地衣）がいっぱいあって、コケモモと混じり合っている。何やら綿みたいなのがふわふわして、どうやら矮生柳の去年の実のようだ。白い毛の密生した冬芽もたくさんあるがまだ芽吹いていない。そのほかにスゲのような枯れ草がちらほらあるだけで変化に乏しい気がした。

小尾根を巡って、沢の源頭のようなところへ降りると沢の奥に今まで見えなかったキリリとした黒い岩山が見えてきた。さして遠くないのだが、小さな峠を隔てた向こうで顔を覗かせている。そろそろ引き返す時刻にあった僕にはしかし、ずいぶん遠いようにも思えた。記念に写真を1枚撮って、石を採集して帰路に着く。一層腐った雪の中

を歩き B.C.に着いたときには、もうみんな夕食後の茶も飲み終えていた。

△▲△



ユーラシカ

6月9日（火）快晴

ハンガールへのアタックを終え昼めしを食った後に、日下と二人で南の谷まで散歩に行く。B.C.から見えていた丘を越えると南西へ下る谷の源頭である。ヒグマのトレースを横切りながら滑降し、最初に流れが顔を出す所まで行った。その辺りだけ涼しい風が流れていて、とても気持が面白い。矮生柳もここでは既に芽吹いていて、白い毛のいっぱい生えた鮮やかな緑色の葉をつけている。水っばいせいか、スギゴケも生えている。周りの斜面にもミヤマハンノキらしき小灌木が生えているのが見え、下に来たなという気がしてちょっと嬉しい。更に谷の下の方では心なしか緑がかかった林が広がっていて、カッコウの声なんぞが聞こえてくる。そこまで行ってどんどこころか確かめたいのだが、とても散歩がてらにふらっと行ってくるような距離ではない。今日はここまでよしとして、少しほっとした後かかったりい斜面をへいこら登り返すことにした。

丘まで登り返すと、日下は外輪山の方へポコポ

コ登りだした。僕はチーズのかけらをあちこちの石の上に置いて、ユーラシカが食べに来るかじっと待ってみた。ところがどうしたことか、奴等はい向に姿を現さない。結局日下が随分登って降りてくるまで1匹も頭すら見せなかった。僕はひどくくだらないことをしてしまったような気がして、ちょっと後悔しながらB.C.まで戻った。

△▲△

6月10日(水)快晴

カルデラ湖をアタックし、晩めしを食った後、最後の夜のための酒会が開かれた。お互い今回の感想を述べ、両国の歌を歌い合い、やがていつしか人数も数人に減った頃、

僕もそろそろ寝ようと一人食事テントから外へでた。

何気なく顔を上げると、何か今までと違う雰囲気を感じた。既に辺りはとっぷりと陽が暮れていて、濃い霧が広い谷底に沈んでおり、その間から時々見える空には谷を囲む山々が月明かりの中影となってじっと僕を見つめていた。そうして

るうちにも霧は動き続け、湧き上がっては山を覆い隠したかと思えばいつの間にかどこかへ引いてしまって、そうすると山々はまた無言で四方から僕を見つめ、酔っているせいもあってか、周囲は静かにめまぐるしく変わった。僕はといえば、じっとしていればいいものを、視線を感じた方へ振り向きながらぐるぐる回ってみたり、写るはずもないのにカメラのシャッターを押してみたり、誰かに言ってみたいけど言ったらみんな消えてしまうような気もして、どうしたらいいのかわからず、そうこうしているうちに霧はすっかりなくなり山々の視線も感

じなくなり、周囲はいつものありふれた景色に戻ってしまった。すると僕もなんかもうどうでもよくなってテントに入り間もなく寝てしまった。

△▲△

6月11日(金)快晴

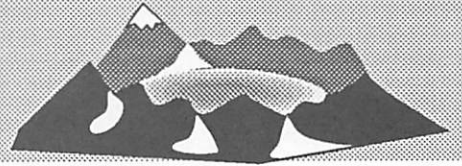
昼頃来るだろうと思っていたヘリコプターが思いのほか早くやってきた。慌てて食事テントをたたんで、別れを惜しむ間もなく乗り込み飛び上がる。ハンガールを一周してからミニコヴァを目指す。眼下には痩せた岩稜と広い谷が幾重にも重なり視野の果てまで続く。高度を下げれば、ツンドラはやがてカンバ林となり、雪解の清流を従えて

浅緑色に染まり、川は幅を増し蛇行をはじめ多くの沼と湿原をつくる。切り立った山々はいつしか丸味を帯び、頂きを下げながら肩幅を広げ丘となって緑濃き平原に消えて行く。僕はカメラには手も触れずただじっと窓から遷りゆく景色を見ていた。山にしろ川にしろ林にしろ、ひとつひとつの要素は北海道のそれら

イチンスキー (3621m)



とさして変わるものではない。しかしながらそれらが集まり重なり合いながらつくる広大な「山岳界」は、日本ではもはや決して見ることでできない世界であろう。今僕はヘリコプターに乗って訪れ、物珍しげに周囲を見まわし、そしてまたヘリコプターで去って行く“E.T.”である。しかしいつの日か自分がその世界の一構成員として自分の足と自分の感性で山旅ができるようになるのだろうか.....爆音の中窓越しの景色を見ながらそんなことを考えているうちに、ヘリコプターはやがてミニコヴァに到着した。



ハンガール火口湖散歩

フラテ山の会 上田エリヤ

6月9日にハンガール峰ピークに立った後、翌10日も快晴だった。しかし、ヘリが迎えに来るのは11日。また日も果てしなく長かったので、ヒマを持って余した有志6名が集まって前日ピークから見下ろした火口湖に行こうということになった。ハンガール湖は東南の岸近くに小さな島が2つあり、あれに渡れたら面白いだろうという話になって、テン場直上の岩峰の南を目指して12時出発。メンバーは植田さん、本多さん、澤田さん、小倉君、そして僕上田である。

☆☆☆

まず岩峰下まで雪渓をスキーで登る。斜度は中程度。標高差約250mで岩の出ている貴部に着く。この下のトラバースはいやらしかった。本多さんを先頭に一人ずつそろそろと通過。

☆☆☆

トラバースが終わるとすぐ火口湖が視界に広がる。手頃な斜面があったのでスキーで下降。デブリはあったとはいうものの、雪は固く、快調。島の正面に着いた。島までは50m位だろうか。湖は氷の上に雪が積もって白い。しかし岸近くには割れ目などもあって緊張させる。抜き足差し足で渡り始めたその時、植田さんがサーっとスケータィングで通過。やられた。スキーをトラバース前で置いてきた小倉君はプラ靴で渡ろうとしている。初めは何でもないように見えた。ところが島との真ん中近くに来たとき、突如ズブリ、と

来た。真青になる小倉君。膝まで沈みながらズブリ、ズブリと前進。ようやく岸に着いた時にはホッと息をついた。靴の中びしょぬれ。15:00。

☆☆☆

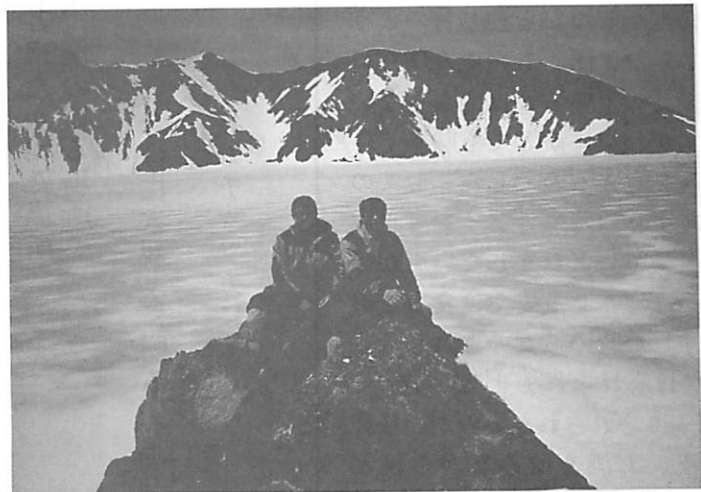
島は北大の中央ローンの半分位の大きさだったろうか。空は快晴。物音一つ聞こえない。白とエメラルドグリーンの湖面は雲の上から見た南の海のような。無風。

☆☆☆

しばし休息の後、帰途に着く。行きと同じ斜面を登る。岩峰下のトラバースは行きより下の雪渓上を通過したが微妙だった。岩峰からは新たなデブリを作ったりしながら重いスキー。17:30帰着。結局一日仕事となってしまった。

☆☆☆

最後になりましたが、今回は部外者ながらこの遠征に参加させていただき、仕事は何もしなかったにもかかわらず、AACHの皆さんのケアのおかげで素晴らしい体験をたくさんさせていただき感謝しています。有難うございました。



ハンガールの火口湖に浮かぶ島

С п а с и б о

本多 和茂

何よりもみんなとても明るい。それが僕の第一印象でした。気難しくてどこかとおつきにくい。そんな僕の勝手な先入観からくる不安はカムチャツカ上陸とともに消え、この短い遠征中でもロシア人のスタッフととても暖かい関係をもつことができました。とても明るく親切にしてくれたロシア人のスタッフ6人には感謝しています。

スタッフの隊長コーリャ。彼のことを名前で覚える前「こぶとりじいさんみたいな人」と呼んでいたのを思い出します。小柄でがっちりした男で、最終日の夜、酒を飲んで意気揚揚と“カチューシャ”を歌ってくれたのを思い出します。

ベースキャンプでコックをしてくれたアーラおばさん、唯一の女性で、正に「母は強し」といった感じの女性でした。とてもおしゃべり好きで、いつも料理をしながら独り言のように話すロシア語。もちろん僕らには何を話しているかは分からないのですが、なにかとても暖かく、親しみを覚えるのでした。お茶のできあがりの時に「アイン・ツバイ・ドライ」とおまじないをかけておどけてみせる姿や、食事をおかわりした時の彼女のうれしそうな笑顔は忘れられません。

何より忘れられないのが、最終日の夜、お酒を飲みながら僕が「アーラおばさんのように料理がうまい人と結婚したいもんだ」と言ったのを通訳が「彼はアーラお

ばさんと結婚したいといっている。なぜなら美しく料理がうまいから」と訳して、アーラおばさんがてれくさそうに、「年が違い過ぎるから結婚はだめだけどいつでも養子にしてあげる」としてくれたことです。まあちょっとした笑い話ですが、もしアーラおばさんがもっと若くて独身だったら何て答えてくれたんだろうか？とふと考えてしまう。そんな魅力のある女性でした。

一方、陰ながら彼女を助け、僕らのために素晴らしい料理をつくってくれたバーシャ。物静かな感じで、いつも言葉すくなに、僕らの食事風景を優しく見守ってるそんな感じの人でした。「ミスターホンダ」となれない英語で僕を呼びにこにこしながら差し出すハラショーポーズには彼の優しい人柄がにじみ出ていました。

そしてボーリア。この男程、ボディランゲージのきまる人もなかなかいないんじゃないかと思

優しくなれる場所
素直になれる場所
生まれてきた喜びを
生きていく喜びを
ゆっくりと吸い込む
深呼吸の中に

君と来たい場所
君と来たい場所
君と来たい場所
君と来たい場所
君と来たい場所
君と来たい場所

君と来たい場所
君と来たい場所
君と来たい場所
君と来たい場所
君と来たい場所
君と来たい場所

今は亡き親友に贈る

カムチャツカにて

いました。目が合う度に、にこにこして何か言ってくれるのですが、その笑顔、表情だけで何か伝わってしまう。そんな感じの男でした。彼は別れの空港で何も言わず、初めて見せた悲しそうな表情で、肩を組んで、頭をコツンとぶつけてくれた時、本当に別れのつらさ、名残惜しさに胸がつまり涙をこらえたものでした。

通訳のバレーリア。彼はロシア人ながらのりはアメリカ人といった感じのとても陽気な男でした。僕らの歌った歌を一生懸命覚えようとしたり、ことあるごとに親しげに話しかけてくれたり、僕らと少しでも多く、コミュニケーションをとろうとする真な姿が印象的でした。彼とサングラスを交換し、次の日空港で肩を組んで取った写真は僕のお気に入りの一枚になっています。

最後に「ライクメスナー」とぼくらがよんでいたフェージャ。彼とは親しくなればなるほど、本

当にいい奴だなと思えてくる。そんな感じの人でした。彼が僕らにカムチャツカの思い出にといっかけてきてくれた石。その中で一番大きかったのが、今僕の部屋にあります。僕らがもらおうとしたとき慣れない英語とゼスチャーで「一生懸命運んで来て誰ももらってくれなかったらと心配していた」といって「Especially for you」とうれしそうにしていた彼の笑顔がわすれられません。

別れの時、「Mountaineering is not my hobby. It is my life.」と笑って見せた彼。正に彼にぴったりの言葉でちょっぴりうらやましく思いました。

以上ロシアのスタッフについて書きましたが共通していえるのは、みんな本当に笑顔がとても美しい。笑顔は世界共通で、言葉以上のコミュニケーションを果たすものだということを実感しました。

そんなロシア人のスタッフの笑顔にわすれかけていた、そして心のどこかで探しつづけていた本当の優しさを見つけ、そして出会えた。そんな気持ちにさせてくれたのでした。

君と来たい場所 ところ

今、僕がいる場所 ところ

君のあの笑顔が目に浮かぶ場所
澄んだ君の瞳を思い出す場所

あくせくしない場所

君がかつて憧れた都会のネオンとは

反対の場所

君は何をしてる

僕の手帳のスケジュールはここ数日

真白なんだ

君と来たい場所

何の言葉もいらぬ場所

すいこまれそうな青空と

ゆっくり流れる雲

遠くの山々が

やさしく目に入ってくる場所

時間の流れが、すうっとそよ風に

とけていくような
そんな場所

7. アムール河に陽は落ちて

ハバロフスクの夜

フラテ山の会 小杉 尚

我々がアムールの河畔に着いたのはもう九時を廻った頃であった。ハバロフスクの長い昼が漸く終わりかけ、夕陽が照るにはまだ早い、そんな時刻であった。我々3人は山行終了後、他の7人と別れ一日だけこの街に留まっていたのである。

◆◆◆

遙か向こう岸も見えない洋の如き大河には船が散在している。一部はどうやら遊覧船の様である。そこで3人はその内の一隻に乗ることにした。ところで、この船はかなり可笑しい所があって、遊覧船であるのに観光客の姿が全く見られないのである。客は地元の若い男女ばかりであった。

◆◆◆

何故か我勝ちに船に乗り込もうとする彼らに混じり、何とか中に入れてみて初めて、理由が察せられた。外からは分からぬが、中はカウンターがあり、一種のバーのようになっているのだ。我々はそこを後にし、景色の見渡せる二階へと上がって行った。

◆◆◆

ところが、船の出港と同時に急に階下が騒がしくなった。どうやら唯のバーではなくてディスコになっているらしい。ここに来て全ての疑問が解けたのである。即ちこの船は単なる遊覧船ではなく、一種のデートコースとなっているのだ。道理で若い男女ばかり乗るのである。「ウム大変な船に乗った」と思っている内に、一人のロシア人が話しかけてきた、ナポレオンを片手に。彼は英語を解せず、我々も露語を解せない。それでも何度か互いに杯を揚げれば心も通じる、気持も昂じ

る。そして彼と共に階下へ踊りに行く事になった。

◆◆◆

さて、ディスコは物凄い熱気である。ハバロフスクは見廻った限りでは歓楽街がある様子は無かった。従って、若者達のエネルギーはこの様な場所でしか発散されぬのではないだろうか。それ故、ここには濃縮された活気があるのだ。彼らは飲み、唄い、叫び、踊り続けた。船が再び元の河岸へ戻るまで。彼らに混じり、踊り疲れた我々が船を後にしたのは夜も十二時を過ぎてからである。疲れた身体にアムールの川辺を通る風が心地良かった。

◆◆◆

ロシアの素晴らしい若者達に、そしてハバロフスクの熱き夜に乾杯。



イチンスキーで見た熊の足跡



ハバロフスクの夜

澤田 実

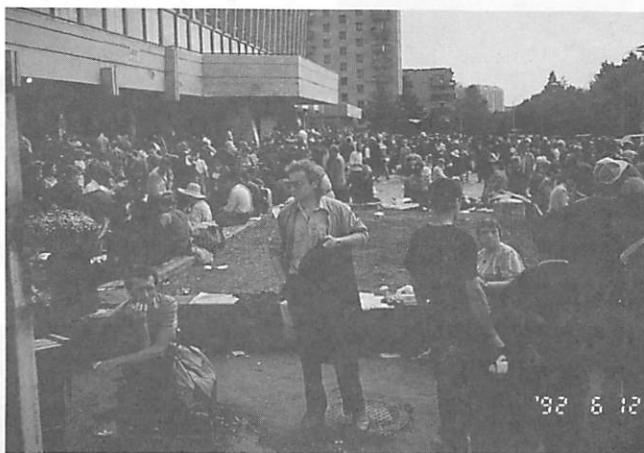
夜9時にみんなも宿に帰ってきた。ハバロフスクに残された小杉さん、銭谷と僕の3人は9時まで自由時間で、それから宿で飲もうという話しをしていた。しかし、銭谷が街で買った地図をみせて、実はアムール川が近いからこれから夕陽を見に行こうという。アムール川なんて実に大陸的な響きがあり僕の旅情をくすぐるものがあった。3人の意見は一致し、アムール川に向かった。



夕方のアムール川は心地よい涼しい風が吹き、流れているとは思えない広い水面が雲から顔を出す太陽の光を反射させている。そこは胸ぐらいの高さの防波堤があり、そ

の外は公園になっていてアベックや若者グループが思い思いに楽しんでいる。内側は砂利浜で遊覧船がいくつかとまっていた。河を見ているうち遊覧船に乗ってみようという話になり、どうにかチケットを買い求め、その日の最終遊覧船に乗った。乗客は若者ばかりで奇声をあげながら先を争って乗ろうとする。何

だろうと思ひながら船内に入ると、いきなり正面にピンクの文字の「BAR」という看板が目飛び込んできた。周りには色とりどりのライトや飾りがつけてある。この船は二階建になっていて、二階は後ろ半分に屋根、壁のない観覧席になってい



ハバロフスクのバザール

るが、一階はどうもディスコのようなものである。僕らは驚き半分呆れ半分で二階に上がり、席を取った。二階に来る人はあまりいない。船が動き始めるとディスコが始まった。ビートを刻む音が低く足元から響いてくる。



しばらく動く船の風にあたりながら川面を見てみると、年は高校生ぐらいか、4人組の男が声をかけてきた。そのうちの一人は妙に人懐こく、僕らに酒を飲めと持っていたナポレオンを勧めてくる。僕は初め警戒したが、次第に慣れてきてお酒をいただいた。酔っ払いの彼とほろ酔いの僕らは、ロシア語と日本語でどうにかこうにかありきたりの話をしていた。やがて彼は、女をつかまえ

なきゃいけないということを言ってきた。ロシア語は全くわからなかったが、彼が「見てろ」といって両手で胸の形を表現し、内股で尻をふって歩いてみせたことで僕らは了解した。彼はいいアクターだった。そして、「待ってる」と僕らに言うで一階に降りていった。しばらくして背の高い細身の女の子が上がってきて、僕ら

の横に座った。どうも彼が呼んだらしい。彼女も酔っているのか、ニコニコしながらロシア語で話しかけてくる。僕らがお互い日本語で話すと「日本語はダメ」と笑いながら怒る。また彼が戻ってきた。今度は踊りに行こうという。「よし」酔い



もまわってきていい気分になっていた僕は、彼について下に降りた。



下では所狭しと若者が踊っていた。ロシアの若者のパワーはこんなところで爆発していたのだ。アップテンポの曲に合わせて、皆好きなように身体を揺らしている。踊り始めれば誰でも友達である。周りの5、6人と輪をつくるようにして踊ったが、誰の目を見ても笑顔が返ってくる。僕も久々に汗を流して楽しんだ。やがてスローバラ



ハバロフスク空港前にテントを張って泊まる

ドが流れだした。周りの人達はそれぞれに男女でペアを作り、一転して静かに踊り始める。すると彼が「女をつかまえろ、ほらあそこに空いている女がいる。」と、一人でいる女を指差し、僕の肩を押した。僕はよく分からないままに、そんなものかと思って女の子の前行き「バチャールスタ」と声をかけた。すると女の子は僕が外国人であることに気づいたらしく、どうしようといった感じで笑いながらためらっていたが、すぐ手をつないで踊ってくれた。彼女は小柄で笑顔の可愛い子だった。名前を名乗ってくれたが、残念なことに忘れてしまった。



アップテンポな曲が3、4曲続くとまたスローバラードになる。気が大きくなっていた僕は意気込んで、今度は進んで声をかけた。色の白い、少しポッチャリした感じの女の子だった。「バチャールスタ」。すると彼女はニコッと笑っただけで何も言わず、僕の胸に入ってきた。さっきは手をつないだだけなのに、今度は身体をくっつけてくるのではないか。僕はこんな踊りしたことがない。しかしどうにか彼女の腰と肩に手を回し、ペースを合わせた。しばらくして気づくと彼女はじっとこっちを見ているのではないか。僕がいい気になって見つめ返すと、見つめ返してきて目をそらさない。急に鼓動が高まり、僕はどういしていいのか分からなくなった。すごく緊張して、それ以来彼女の目を見れない。こんなときの男はどうしたらいいのか。僕が心の中で必至に汗をかいている間に、曲は終わり、彼女は挨拶もなしにスッと行ってしまった。僕はいろんな意味で後悔し、自分が恥ずかしかった。



間もなく、船は岸に着いた。もう十二時になっていた。乗船所から離れると人気が無くなる。三人でとんだハプニングだったと話しながら大通りまでトボトボ歩いた。静かな薄明るい大都市ハバロフスクの夜だった。



ベースキャンプへの移動はエアポートのヘリコプターを使った

8. 資料

涉外

小倉 憲悟

I エージェント

ロシア旅行のビザを取得するには、ロシア側に受入団体を見つけてそこからの招待状を得なければならない。現在、カムチャツカには観光や山登りを目的とする外国人を扱う会社はいくつかあり、それらが受入団体となってカムチャツカ旅行のコースや宿泊などのアレンジをしている。

前回の遠征隊（91年）はその中の最大手である Kamchat intour を利用しているが、今回は学生中心の隊で予算をなるべく安くおさえないという希望から、Kamchat intour と前回の遠征で知り合ったガイドが所属する Kamchatka adventures の二社を選び、こちらの希望に合ったプランを示してくれるほうを選ぶこととなった。こちらの希望は、

- ・スレディニー山脈のイチンスキーとハンガール、クロノツキーの登頂
- ・隊員数10名
- ・期間は5月下旬から6月下旬の約1ヶ月間
- ・カムチャツカ内の予算総額 U.S.\$ 10,000 である。

実際に交渉に当たってみると、カムチャツカとの通信手段がほとんど TELEX に限られることなどから非常に時間がかかり、細かい事項の確認や問い合わせとなると容易な作業ではない。これらの煩わしさなどから結局、早目に具体的な内容を提示してきた Kamchat intour と契約することとなった。契約した内容は以下の通り。

- a) 期間：6月の最初または次の火曜日から二週間

- b) 人員：日本人10名とカムチャツカ側ガイド・通訳6名
- c) 登山：イチンスキーとハンガール
- d) 費用：U.S.\$ 10,000（計画開始2週間前までに半額を指定の口座に振り込み、残りは計画終了後に支払う）
- e) Kamchat intour側で用意するものとして
- ・ビザの手配
 - ・ハバロフスクーペトロパブロフスク間の航空券の予約
 - ・カムチャツカ内でのヘリコプターなど移動手段の手配
 - ・ホテル、食事の手配
 - ・通訳、ガイドの雇用

費用の支払いは、ロシア内の銀行が正常に機能していないとして、日本国内の銀行から振り込むことはできなかった。また、旅行小切手やクレジットカードはカムチャツカでは使用不可能なので、実際には、米ドルを現金で持ち込み、計画前と後の二回に分けてペトロパブロフスクの銀行で振り込んだ。

II 航路

新潟ーハバロフスクーペトロパブロフスクとすべて空路であった。サハリン経由の海路は、まだ船が定期化していなかったのが今回は諦めたが、今後はこの航路を使えばもっと安く行けるようになると思われる。

III 査証

ロシアへ行く際のビザの申請手続きは旧ソ連のビザとほとんど変わりはない。所定の用紙に必要事項を書き込み、写真・パスポート・受入団体の招待状（契約書）を添えて、在札ロシア連邦総領

事館に提出する。今回は総領事の不在、副領事の帰国など、人員削減の影響もあってか、なかなか事が進まず、ビザがおりたのは出発の3日程度前だったので、遅くとも4週間以上前には申請しておいたほうがよいだろう。なお、これまでソ連人にも必要だったカムチャツカ入域のビザは現在では必要なくなっている。

IV ガイド・通訳

Kamchat intour には専属のガイドがいないので、主に山岳クラブ Ky T x からガイドを雇っている。彼らは非常に経験豊富で、カムチャツカの山について詳しく知っているので頼りになる。通訳については、数少ない日本語の通訳を雇うと高くなるので、今回はガイドの中に英語のできる人が入った。彼らは、コックを連れていくのが習慣であるらしく、前回同様、ベースキャンプでは、アールおばさんのつくるロシア料理を毎日腹一杯食べることができた。

V 保険

カムチャツカ登山はまだ未知の部分が多いということから、海外旅行傷害保険の契約ができる保険会社は限られる。今回は、東京海上火災の傷害保険に加入した。

VI 緊急時の対策

今回は、非常に山深く、自力で下山できる場所ではなかった為、何か起こった場合でも、迎いのヘリコプターが来るまで待たなければならなかった。また、留守本部との緊急の連絡路として、北海道海外炭供給会社のペトロパブロフスク支社のテレックスを使わせていただくこととした。

装備

日下 出

普段Roomが山に行く装備と全く変わらず、特に軽量化や新しい装備を使用することはなかった。従って、下に示した団体装備と冬山個人装備が各自の装備である。

石油ストーブ	2
EPIヘッド	3
EPIカートリッジ	14
ダンロップテント (4人用)	1
ダンロップテント (2人用)	1
エスパーステント (5人用)	1
ツェルト	1
修理具	2
ザイル ϕ 9mm \times 40m	2
ハーケン	数枚
なべ	2
ポリタンク (2リッター)	4
スノーソー	2
鋸	2
スコップ	2
無戦機	3
ローソク	6
たわし	3

ダンロップテントの外張りをツェルトとして使用した。

この時期はほとんど太陽が沈まないのでローソクは不要であった。

キャンプでの炊事はコックがやってくれたので、ストーブは行動用のガスストーブで十分であった。

食料

銭谷 竜一

I 準備

食料についての現地との連絡が全く取れなかったため全て日本から持ち込むことにした。ベースキャンプ食、行動食共に我々が国内山行で使っているものと全く同じもので、軽量化を除いて、特に今回の山行を意識したものではない。

II 現地

実際にはインツール側でベースキャンプ食を用意していて、我々は毎食、アーラおばさんのおいしい料理を腹一杯食べることができた。食事の内容を以下に記す。



ベースキャンプでの食事、アーラおばさんのロシア料理に大満足

<黒パン>

バター、ジャム、コンデンスミルクなどを付けて食べる。少量でも結構腹が満たされた。

<スープ>

牛肉、ジャガイモが主。よく煮込んであり、味付けは塩、胡椒、トマトペーストなどで、月桂樹とチクロで香付けしてあった。毎食みんなで先を争うように何杯も食べた。

<副食>

鮭の燻製と、トマト、キュウリの漬物。酢につけてあってはじめは若干抵抗があったがすぐにやみつきのになった。

<茶>

食後はかならず紅茶。Шиповник (野莓) の実の茶は大好評だった。

III 現地調達の可能性

わずかな時間だったがペトロパブロフスクのバザールと食料品店をみたところ、特に食料が不足している様子はなかった。物価は最近急激に上昇しているという話だが、食品は他の物に比べかなり安いようだ。今回食べたものは全て店頭で並んでいた。

今回は現地との交渉が足りなかったが、次回以降はよく連絡をとって現地で調達するものを決めていけばもっと安くすむだろう。

気象

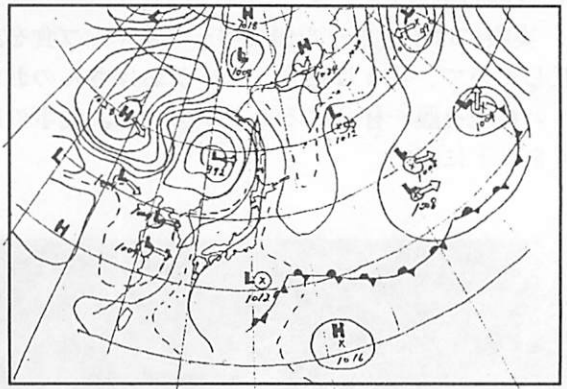
銭谷 竜一

天気はイチンスカヤのB.C.に入った6月3日の晩とアツクをかけた4日の午後に雪が降っただけであとは晴天が続いた。雪は乾いた雪で10~30cm位の積雪量だった。イチンスキーでは朝方の雲一つない晴天から昼頃には雲が出始めピークも見えなくなり、夕方には曇天になっているという毎日であり、また、どちらも全く無風であった。晴天時

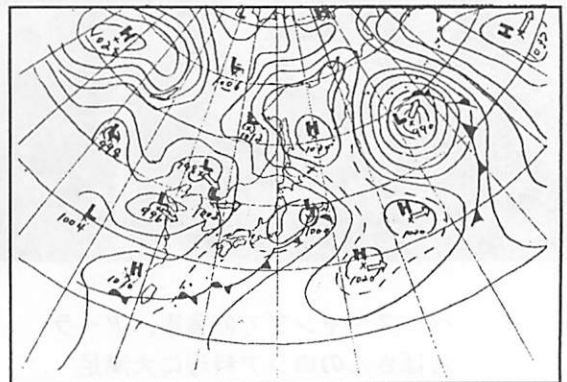
の日射はかなり強く、気温も上がり、パンツ一枚で日光浴できるくらいだったが夜にはかなり冷え込んで氷点下になり、霜柱が発達していた。6月初旬のこの時期にこのように晴天が続くのはオホーツク海に発生する高気圧の影響によるものであり、気温の日較差の大きさは内陸部のツンドラ地帯の特徴である。

以下に、帰国後、札幌管区气象台にいただいた天気図によるペトロパブロフスクの天候と半島付近の気圧配置の概略、ピーク登頂時の天気図を載せる。(現地時刻13時、サマータイム)

日	全雲量(10段階)、雲の種類 気圧配置の概略	風向風速	気温
6/1	8、絹積雲 半島北部に低気圧(996)	なし	11℃
6/2	8、高積雲 高気圧の尾根の通過後、弱い低気圧の通過	なし	12℃
6/3	8、積乱雲 沿海州から低気圧が弱まりながら北千島を通過 オホーツク海に高気圧発生(1024)	N5	6℃
6/4	8、層積雲 半島北部の高気圧と融合、その張り出しに包まれる	なし	6℃
6/5	8、積乱雲 気圧の尾根の張り出しの中	NNW5	6℃
6/6	7、高積雲、積雲 オホーツク海北部の高気圧(1028)の圏内	なし	8℃
6/7	3、積乱雲 オホーツク海中部の高気圧(1028)の圏内	なし	13℃
6/8	7、高積雲、層雲 高気圧勢力弱め南北にふたつに分かれる	SSW5	8℃
6/9	3、絹雲、積乱雲 オホーツク海の高気圧弱まりアリューシャン 列島南方の低気圧990勢力弱める	なし	12℃
6/10	7、絹雲、高積雲、積積雲 高気圧弱まり南下、低気圧強まる	SSE5	15℃



6月4日 0:00 (W.T)



6月9日 0:00 (W.T)

会計

本多 和茂

収入

隊員個人負担総額	¥2,500,000	
寄付金	¥1,234,970	
雑収入	¥14,896	
計	¥3,749,866	¥3,749,866

国内支出

テレックス	¥28,021
地図	¥4,068
連絡書類発送代	¥17,794
食料	¥31,720
装備	¥21,400
航空券 (新潟ーハバロフスク間)	¥1,224,412
保険代	¥312,000
ビザ申請料	¥5,0000
計	¥1,689,415

国外支出

登山料	\$10,000
航空券 (ハバロフスクーペトロパブロフスク間)	\$3,520
荷物超過料金	\$265
計	\$13,785

支出総計 (1\$=¥130) ¥3,481,465

収支

¥268,401

残金は報告書作成費にあてる。

御協力者芳名録

相田学，明智洸一郎，朝比奈英三，有馬純，安藤朝夫，安藤久男，安間元，安間荘，五十嵐八枝子，池上宏一，井沢憲文，石島三行，石田隆雄，石橋岳志，石村明也，石本恵生，入川真理，上野八郎，越前谷幸平，遠藤禎一，遠藤一，大井幸雄，大賀皓，大戸昌雄，岡島伸浩，岡本丈夫，表雅英，神前博，河合範雄，川崎信男，菅野信夫，佐藤行郎，北古味雄，北村一夫，木村恒美，木村隆之，沓沢敏，工藤哲靖，熊野純男，黒川武，小泉章夫，後藤孝俊，小林年，駒沢欣一，小山正，佐々木幸雄，笹瀬雅史，佐藤貴美子，鮫島和子，鮫島惇一郎，志賀弘行，芝山良二，清水収，下沢英二，杉野目浩，鈴木弘泰，鈴木良博，須田長良，住谷俊治，住吉幸彦，積和人，高田寛之，高橋昭好，高橋一穂，高橋浩，高橋宏治，高原昌也，高松秀彦，永光俊一，竹田英世，戸田英明，内藤拓，永尾一平，中島秀雄，中谷好治，中村晴彦，名越昭男，西信三，西信博，西安信，丹羽由紀夫，野田四郎，花井修，福尾克也，伏島信治，古川幹夫，古瀬健，星野好博，北海道海外炭供給株式会社，本間敏彦，益田稔，松下彰夫，松村雄，毛利立夫，柳沢盛雄，矢野実，山口隆，山口斌，山田真弓，吉田勝，吉村啓一，米山悟，渡辺勇，渡辺真之

以上の皆様（1992, 7, 23 現在，五十音順，敬称略）

遠征隊留守本部

代表：

上野八郎、上野法律事務所

山岳部長：

西 信三

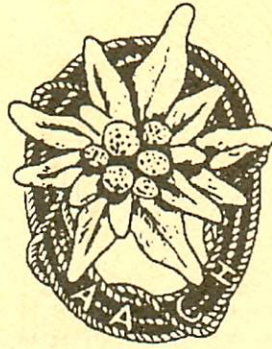
山岳部主任幹事：

梶川耕司

スパーバイザー：

小林 年、越前谷幸平、

下沢英二、伏島信治



Academic Alpine Club of Hokkaido

非 売 品

発行日 1992年 8月31日

編集者 北海道大学山岳部カムチャツカ遠征隊1992

発行者 〒060 札幌市北区北12条西17丁目
北海道大学サークル会館
北海道大学山岳部
TEL 011-716-2111, 内線5592, 5593

印刷所 高速印刷センター
〒006 札幌市手稲区曙2条5丁目2-48
